



ふかしぎ (無料
版)



栞

ふかしぎ

あしゆびに触れた、おだやかなつち。
あまいろに泳いだ、とんでゆけ、風に鳥。

広がった水面に、憂いて頬寄せ。

呼吸する球体にからだをあずけた。

(みんな、うまれ、くちる、ふかしぎ)

ともしび

とおく、朝の音が聞こえる。
烏の羽が濡れ、白みがかった曙を超えて。

もえる、橙。滲むように零れる。
早足な血流に、心臓があつい。

しけた、露草にしだれる甘い枝。
瑞々しい唇に、だんだんと赤が差す。

陽が昇る。
明けた夜は背に回った影に隠れ、刻一刻と伸びてゆく。されど、足から離れることはなくて。

あこがれ

吾、焦がれ(あ、こがれ)。
ふざけた夜を身に纏い、あふれた夢に彼(か)をさがす。

此(こ)はいずこと問うたれば、あまくさざめくほしのうみ。

ふわふわ

艶やかに舞う小宇宙。
黄金色の魂が蛍のように膨（ぼう）と火照る。

動脈がとくり、とく。とく。
しっとりと疼く芯に、静かに感じる私の吐息。

跳ねてゆく魔法の兎。
綿毛が紡ぐ穏やかな歌声。

手のひらは重なる。
ふわふわとこの輝き。

くちびる

仰げ、歌え、最愛の。
大気に飛散したささやかな安らぎ。

君よ、響け、特大の。
おもいを乗せて、口ずさむ夢。

肌にするり、融けてゆく言葉。
あまく香る、舌に擦れて現世。

さざめく胸に花開いたところ。
指先でなぞった、君のくちびる。

ほしぞら

聞こえてますか、ほら、ぼくのこえ。
幾億のきらめきが、そこには佇んでいて。その濃度は無限大。常に溢れては零れてゆく。

足場から見渡した世界は、きゆう。とひとつに凝縮されて淡く翡翠。
くらくらとしてしまいそうな光に、おやまた、幾筋の光ほろり。

遠くのほしからこんばんは。
今宵も60億の星々がちいさく小さく息をして、銀河系に火を灯す。

はなびら

海はいずこ。

七色のときを経て、幹がまた、一回り力強くなる。虫たちは体を起き上がらせ、蜜を探して南へ向かう。

さやさやと風の音。
穏やかに綴じたいのちの包み。
朗らかに匂う、桃色の桜貝。

目を覚ますはなびら。
そしてまた広がり、散りゆく。それはまるで沈んだ骨、大地という海へ。

あまつち

沁みてきた涙に土気色が深まる。
しっとりと膨らんだしゃぼんだま。地におちて弾けて飛散。

歩く道に、足裏。
蹴って、倒れて、手折れて、生きて。擦りむいた膝が、幾度となく黒くなる。

肩に触れる雨。
立ちあがり、近くなる、天（あめ）。

あまつち。

全てを支え、全てを見守る、宇宙のかけら。

おいしいれ

飴色のアルバムが朽ちかけのダンボールにぎうぎうに押しこめられている。

今瞳の前にあるものは鮮やかに色付く現在。
横切り私の胸を過ぎた彼らは、褪せてゆく銀杏の葉のようにセピア。

一分前の私。
三年前の私。
十年前の私。
いつしかの、私。

重なり合って、重たくなって、そうするとまた荷物を下ろして。
きゅう、と冷たく、温かくなる。
しかくい箱。
あまい、おいしいれ。